

巻頭言

校長 森田淳士

コロナ禍 2 年目となった令和 3 年度の教育活動でした。昨年に引き続き、生徒たちが校外に出向いて発表する機会も増えないままの 1 年間となったことは大変残念でした。一方で、ICT 機器を活用した研究活動やリモートでの情報交換などは予想以上のスピードで進んでおり、マイナス面とプラス面が混在している状況の 1 年間でした。

本校の SSH 事業の取組も、第 2 期の 4 年目となり、通算で 9 年目となります。昨年度の中間評価を踏まえ、御指摘や御提案をいただいたことに対し、全校で課題の解決や改善策の構築ができるように取り組んでいるところです。来年度は、第 2 期の最終年度となり、この 10 年の取組を総括・検証し、次のステージに進めるように、職員・生徒と一丸となって研究開発に取り組んで参りたいと考えています。

さて、2021 年は眞鍋淑郎博士がノーベル物理学賞を受賞されました。御存知のとおり研究内容は気象学であり、大学時からの研究の期間は 70 年にもなり、研究者の苦勞を感じずにはられません。しかし、眞鍋博士が先駆的な研究成果を出された時期は、1960 年代からであり、年齢では 30 歳代の頃となります。文部科学省調べのデータでもノーベル物理学賞の受賞者の受賞のきっかけとなった論文を発表した年齢は、35～39 歳が最も多く、次いで 40～44 歳、そして 30～34 歳となっています。日本人受賞者では、湯川博士の 28 歳、江崎博士の 32 歳、福井博士の 34 歳となっており、大学卒業後の 10 数年で大きな成果をあげられていることがわかります。受賞される時は御高齢の印象がありますが、やはり若い時期からの研究活動がいかに重要であることを再認識させられます。

2002 年から開始された SSH 事業も今年度で 20 年となり、SSH 1 期生は 30 歳代半ばになっています。まさに、将来のノーベル賞を受賞するような研究を行っている SSH 指定校出身者がいると感じずにはられません。高校生で課題研究を発表していた生徒が大学生となり、後輩の研究発表で質問する姿を見ると、2～3 年の間に見違えるようにしっかりとした質問や助言ができるようになって、その成長に驚くことが度々あります。さらに数年後には、立派な研究者となっているだろうと予感させられます。若い人たちの成長のスピードには感心させられるばかりです。

SSH 事業の本質目標を考えると、生徒にどのような力を身につけさせ、どのような人材育成を行うかということに最終的に帰着きます。そのために、活動内容や教育課程などがどうあるべきかを議論し、実践している日々です。日ごろから様々な取組に効果があるかを意識し、課題があれば改善を続けている状況です。この 1 年の成果にこだわりながらも、生徒たちの一生に影響を与えるような活動であるべきだとも思います。生徒たちが自分自身の人生を歩んでいく際に、自ら考え、自ら課題解決をはかる能力を少しでも身につけることができるように SSH 事業をとおして教育活動に取り組まなければならないと強く思います。

最後に、本事業に御指導を賜りました文部科学省、国立研究開発法人科学技術振興機構、SSH 運営指導員、関係の研究機関・教育機関、そして県教育委員会の皆様方に心より感謝申し上げます。本事業報告書を御覧いただき、さらなる御指導・御助言をいただきますようお願いいたします。